

南蒲生で生き残った植物(2)

海浜で見られる植物に共通する特徴があります。まずは、葉が肉厚であることです。海浜近くは塩分濃度が高く、生物が利用できる水が少ないため、葉の中に水分をため込むと言われています。また肉厚であることから頑丈であり、飛砂などによって損傷しにくいとされています。



次の特徴は、一様に花が大きいということです。ハマエンドウにしてもハマナスにしても、37号で取り上げたハマヒルガオにしても、植物体そのものは大きくありませんが、花だけがアンバランスなほどに大きいというのが特徴です。しかも様々な科に共通する特徴です。このことについていろいろな説明がありますが、一番は海浜近くには花粉を運んでくれるであろう昆虫類が少ないため、大きな花をつけて目立つようにしているというものです。

確かに花が大きいとして紹介した種類は全て昆虫によって受粉する種類ばかりです。この説明にはコウボウムギやハマニンニクのような風による受粉をする種類の花は特別に大きいわけではないということも裏付け根拠の1つになります。

2回にわたって南蒲生で生き残った植物を紹介しましたが、津波前に比べると生育している範囲は著しく狭い範囲ですし、個体数も少ないのが現状です。これらの植物は仙台市民共通の自然遺産として、私たちの次の世代にも残していく必要があると思います。



左上：ハマエンドウ

左下：ハマナスの開花

右：例年以上の花をつけるハマナス群落